

機関番号：14401

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2008～2010

課題番号：20520227

研究課題名(和文) 近代イギリス文化における「快」とフィジカリティの研究

研究課題名(英文) Pleasure and Physicality in Modern British Culture

研究代表者

小口 一郎 (KOGUCHI ICHIRO)

大阪大学・大学院言語文化研究科・准教授

研究者番号：70205368

研究成果の概要(和文): 人間が感ずる「快」と「苦」を計量的に考察することに立脚する功利主義思想は、イギリス近代哲学の一大思潮である。本研究では、さまざまな文化言説に現われる「フィジカリティ(身体性=物質性)」の観点から、この功利主義を再解釈した。そしてこの過程で明らかになった、身体文化や物質文化に根ざした新たな功利主義像にしたがって、18世紀から19世紀中期までの文化・思想事象、および文学に代表される感受性のあり方をとらえ直すことを試みた。

研究成果の概要(英文): Utilitarianism, a school of thought advocating the qualitative understanding of pleasure and pain, constitutes one of the mainstream traditions of modern British philosophy. The present research project reinterpreted utilitarianism from the viewpoint of “physicality,” i.e. the consciousness of the materiality of human psychological experience. On the basis of the renewed understanding of utilitarian thinking thus obtained, the project then examined cultural-philosophical phenomena in Britain from the 18th to mid 19th century, including the issue of sensibility explored in literary and other intellectual discourses.

交付決定額

(金額単位:円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	700,000	210,000	910,000
2009年度	500,000	150,000	650,000
2010年度	600,000	180,000	780,000
総計	1,800,000	540,000	2,340,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・英米・英語圏文学

キーワード：功利主義、ロマン主義、身体、快と苦、自然哲学

## 1. 研究開始当初の背景

英米系の文化や思想を読み解く場合、「快(pleasure)」と「苦(pain)」という功利主義の概念は欠くことのできない要素である。ところが、伝統的に文化史や文学系の研究において功利主義は軽視されがちであり、功利主義哲学者ベンサムのパノプティコン概念についての研究を除けば、主要テーマとなることはあまりなかった。また Frank Kermode が指摘したように、文学・芸術批評も、「快」

と「苦」の問題を長い間扱いかねて来た。本研究科の開始時において、「快」と功利主義の問題を文化史・文学批評の観点から考察する本格的な研究は少数であった。

その一方、文化研究においては身体や環境がクローズアップされつつあった。文化の物質性(フィジカリティ)が再認識され、この観点から「快」と「苦」の問題や功利主義に新たな光を当てることが可能になるうとしていたことが Roy Porter, Marie

Mulvey-Roberts, Francis Ferguson らの研究からうかがえた。

このように、研究の必要性が存在したにもかかわらず見過ごされていた領域において、有意義な研究成果をもたらすことが予想されるアプローチが出現しつつあった状況が、本研究開始当初の一般的背景である。

## 2. 研究の目的

上記の研究の背景を受け、本研究は、功利主義が発展したイギリスの18から19世紀中期を射程におさめ、「快」というサイコ・フィジカルな感覚こそがイギリス近代文化の中心的概念の一つであったことを論証し、文化史的知見の刷新を図ろうとしたものであった。

## 3. 研究の方法

(1) まず古典古代より、近代イギリス思想まで「快」の系譜を概観し、この感覚を身体・物質性(フィジカルリティ)思想として再定義する。

「快」は古代より黄金時代を象徴する感覚であった。またエピキュロス派が主張したように、「快」は唯物論的宇宙観を伴いつつ、身体性を含意するフィジカルリティの思想を伴っていた。ホラチウス以来、芸術の教育的役割を推進する手段とも見なされている。

これらの点を確認した後、「快」の文化史をイギリス近代にまで跡づけ、経験論に代表されるイギリス思想が、「快」と「苦」の身体・心理感覚に基づく功利主義思想でもあったことを考察する。さらに18世紀の楽観論や進歩主義が、「快」に人間の宗教的救済の手段という思想的地位を与えたことを、当時の身体心理学と唯物論思想において論証する。

これらの論証を通じて、「快」を、身体、環境、心理に関わり、宗教、芸術、哲学、政治を横断する近代イギリスの主要な思想要素としてとらえ直す。

(2) 次に、再定義された「快」によって、18世紀から19世紀にかけての文化事象の再解釈を行なう。

出発点として18世紀初頭の人間性格論をとりあげ、当時の思想の流れが「快」とそれを引き起こす環境と身体の相互作用として再定義されることを示す。そのさい、特に物質システムとしての身体、環境の中での「快」の役割を描出した作品に注目する。

18世紀サブカルチャーにおける、「快」への耽溺も、本研究の枠組みで解釈する。

ベンサム功利主義における「幸福の計算法(felcific calculus)」,そして同時代の他の功利主義思想を、「快」の思想の流れと身体性の観点から再解釈する。

18世紀の功利主義思想は、ドイツ観念論

と後期イギリス・ロマン主義の新しい心理観と倫理思想によって思想的に深い次元を与えられている。この点を実証的に追求し、あわせて本研究のまとめとする。

## 4. 研究成果

研究の年次ごとに以下のような研究成果が得られた。

(1) まず「快」の概念、および身体・物質・環境にまつわるフィジカルリティの概念が、西洋の思想史上緊密に関連している事情を通史的に考察した。その結果、これらの概念が形成する概念複合が、イギリス近代の文化史において、フィジカルリティと「快」の功利主義を生み出していく経緯が跡づけられ、研究の枠組が歴史的に設定された。

まず古典古代以来のエピキュロス派系統の思想において、「快」と唯物・身体論の接点を確認し、西欧文化の根底に横たわる「快」とフィジカルリティの思想的マトリックスを読みとる作業を行なった。あわせてこれを、西欧芸術のパストラリズムや楽園論における幸福論、および芸術受容における「快」の感覚論と関連づけた。

次に、この通史的マトリックスを基盤に、近代イギリスの、Thomas Hobbes, John Locke, David Hartley, Erasmus Darwinの身体思想をとりあげ、物質・身体(フィジカルリティ)と、「快」「不快」にもとづく、近代の功利主義的人間観の成立経緯を研究した。

この段階での具体的な研究成果は以下の通りである。非専門家向けの啓蒙書において、身体と環境から文学を読む新しいアプローチを発表した(『英語教員のためのリフレッシュ講座』)。18世紀の自然哲学における身体・生命論と、「快」の功利主義の関係を、エラズマス・ダーウィンについてのシンポジウムで包括的に論じた(「イギリス・ロマン派学会全国大会シンポジウム」)。また「快」とフィジカルリティの通史、およびイギリス・ロマン主義の自我および身体意識における18世紀功利主義の系譜について、古典古代から近代功利主義哲学、ロマン派文学までを概観した英語著作の中でまとめた(*Ivy Never Sere*)。功利主義と身体性の問題は、大阪大学大学院言語文化研究科における講義「近代イギリスにおける、物質、身体、環境の文化史」においても論じられ、院生に教授された。またこれらの発表・著作・講義で得られた知見は、18~19世紀の環境文化を論じた英語研究書の翻訳作業、およびその訳注に活かされた(『グリーンライティング』)。

(2) 上記の通史的研究は、次の段階においてより具体的に18、19世紀のイギリス文化・思想の考察に援用され、1)18世紀の進歩主義および救済論の文化事象における「快」の役割、2)「快」とフィジカルリティから見た

18世紀功利主義、3)ロマン主義の詩学における「快」とフィジカリティの3点が考察の対象となった。

人間の行動と心理における「快」と「苦」は、17世紀において上述のホブズとロックによってイギリス思想の中に体系づけられた。18世紀になると、当時の支配的な思潮である楽観主義と進歩主義を背景として、特に「快」の概念が進歩と救済の手段としての地位を付与されていく。また「快」は、同時代の生理学、生物学、心理学を経由することによって、環境と身体と精神に関わる複合的現象として再定義された。この経緯をハートリーの観念連合論における身体心理理論と宗教的救済論の中に読み取るとともに、ハートリーを援用・発展させた Joseph Priestley の楽観論的進歩主義、同じく観念連合論を継承したエラスマス・ダーウィンの生物進化論と環境論の中に跡づけた。サブカルチャーにおける「快」の身体論としては、18世紀末の「動物磁気」をめぐる生命観と文学の関係を考察した。

18世紀後期の主要な功利主義哲学を、Jeremy Bentham らの世俗的近代功利主義と、プリーストリーや William Paley らの神学的功利主義に分けて考察した。とりわけ後者の思想の形而上学的救済論が、18世紀の進歩主義の思潮と呼応し、「快」の感覚に基づいた、環境と身体との交感関係における救済論を形成している点を明らかにした。

ロマン主義の初期において「快」の詩学を提唱した William Wordsworth の文学理論を、功利主義と18世紀的進歩主義、そして「快」の身体感覚の観点から再解釈した。またワーズワスの「快」の文学論やエラスマス・ダーウィンの進化論と環境論を、ロマン主義後期の詩人 John Keats の救済論と比較考察し、18世紀からロマン主義後期に連なる「快」の理論の系譜を研究した。

以上の研究成果は、雑誌論文（“‘Organic Happiness’ versus ‘the vale of soul-making’”）、学会発表（「ワーズワスと功利主義の哲学」）において公開された。さらに大阪大学言語文化研究科主催の公開講座の中で、英詩の解釈の一例として披露され、広く社会に還元されている。また研究の一部は大学院の講義「近代イギリスにおける言語の政治性」において、「自然の書物」「観相学」などの「実体言語」の問題として、言語文化研究科および人間科学研究科の院生に教授された。

(3)最終年次には研究をさらに各論的に進めるとともに、19世紀のポストロマン主義の時代における「快」の思想のあり方を追求することで、研究全体の結論とした。

18・19世紀には“*The Pleasures of . . .*”と題された論考や詩が多数出版されたが、本

研究では、Joseph Addison, Mark Akenside, Samuel Rogers, Thomas Warton, John Clare からこの種の作品を収集し、独立した文学ジャンルとして提起した。そして18世紀功利主義の流れにこのジャンルを位置づけるとともに、ロマン主義によるこのジャンルの継承を考察し、「快」の思想・文化の一つの流れを跡づけた。この中で Cowper, Wordsworth, P. B. Shelley の詩と詩論が“*pleasure poem*”、“*pleasure poetics*”のカテゴリーに属す作品として新たに定義された。

ベンサムが提唱した「快の計算」(“*felicific calculus*”)は、自然哲学における身体論を取り入れつつ、人間の行動を「快」と「苦」の計量的関係に還元し、倫理的行動と社会改善にとっての最適な道程を見出そうとした試みであった。ロマン主義は全体としては世俗的なベンサムよりむしろベイリーらの神学的功利主義に立脚したが、この「快の計算」を、微妙な距離をとりつつも自らの「快の詩学」(“*pleasure poetics*”)に援用している。Edmund BurkeやWilliam Godwin の独特の功利主義思想も、この枠組みの中で取り入れられた。こうした知的営為の中で、ロマン主義は、感覚・環境というフィジカルな次元に立脚した「快」の芸術と芸術論を構築した。また「快」は「進歩・救済」の観念を通して、革命期ヨーロッパの歴史性と関係するが、ロマン主義は神学的・世俗的両方の功利主義を媒介とすることにより、「快」のフィジカリティに歴史性と、進歩・救済という「モダニティ」の要素を付与した。

その一方で、イギリス・ロマン主義は功利主義の伝統とは別種の、革新的な「快」の思想をも打ち立て、ドイツ思想と並ぶ展開を示している。ドイツのImmanuel Kantは「快」を自由意志に立脚させることにより功利主義を超克した。ほぼ同時代にワーズワスとS. T. Coleridgeも、超越的存在の直感や崇高体験を基にして、カントに比肩する新しい「快」の詩学と美学を生み出している。また19世紀の阿片文学は「快」を罪悪感に結びつけ功利主義の基盤を掘り崩すが、他方Lionel Trilling が主張するように、キーツは“*unpleasure*”に人間の尊厳を見出すことで実存主義に接近する観点を提示し、20世紀のヨーロッパ文化の展開を予言した。キーツのロマン主義は、17世紀末に始まる「快」の文化の帰結を示すものとなった。

最終年時の研究成果は、2011年度に口頭発表(6月:関西コールリッジ研究会)および招待講演(8月:Wordsworth Summer Conference)として、また2012年度出版の共著書として公開される予定である。また大阪大学大学院

言語文化研究科における、環境批評と文化についての講義「エコクリティシズムの現在」の中で一部が教授された。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計1件)

Koguchi, Ichiro. “ ‘ Organic Happiness ’ versus ‘ the vale of Soul-making ’ : Changing Attitudes towards the Struggle for Existence in the Romantic Age. ” 『言語文化研究』、査読有、第36巻(2010)、185-200.

[学会発表](計2件)

小口一郎「ワーズワスと功利主義の詩学」関西コールリッジ研究会、2009.11.21、同志社大学

小口一郎(他3名)「エラズマス・ダーウィンの系譜とイギリス・ロマン派」イギリス・ロマン派学会第34回全国大会シンポジウム、2008.10.11、四国大学交流プラザ

[図書](計3件)

Koguchi, Ichiro (他33名). *Ivy Never Sere: The Fiftieth Anniversary Publication of The Society of English Literature and Linguistics, Nagoya University*. 音羽書房鶴見書店(2009)、総555頁(担当91-107)

マキューシク、ジェイムズ C. (小口一郎他2名訳)『グリーンライティング ロマン主義とエコロジー』音羽書房鶴見書店(2009)、総430頁(担当: ix-xv, 115-42, 253-332)

小口一郎(他7名)『英語リフレッシュ講座 学び直したいあなたへ、教え直したいあなたへ』大阪大学出版会(2008)、総295頁(担当: 256-274)

## 6. 研究組織

(1)研究代表者

小口 一郎 (KOGUCHI ICHIRO)

大阪大学・大学院言語文化研究科・准教授  
研究者番号: 70205368